

ところがこの施設は東京天文台の火災の直後、焼夷弾攻撃を受けて完全に烏有に帰してしまった。

さて昭和20年2月8日、東京天文台が皮肉にも火災によって全焼してしまった。私の記憶に誤りがなければ、その日水野さんは神戸におられた。ところで、その朝早くまだ余燼のくすぶっている中で、台長や福見先生、辻先生などとの話合いの結果、報時室を国際報時所の中に急設して三鷹からの報時をつづけることになって、水野さんは急いで帰京され、懸命の設備づくりが始まった。それ以後再び私は水野さんと机を並べることになったのである。

やがて神戸も失ない、報時の予備施設を水沢の緯度観測所にもお願いすることになった。その上近県にも疎開先を探がすべく、前記の自転車での適地探しになった訳である。最後には信州松代への疎開の話が持ち上がり、具体化する直前に終戦となり、困難な戦後を迎えることになった。

無線の送信局はすべて軍の管理下にあったもので、従って終戦と共に報時も杜絶してしまった。これを何とか復興するために水野さんのこの頃の御苦心は大変なものだったと思う。

そうして次に来たものが「分秒報時」であった。戦後国際的な眼が開られると、アメリカではすでに昼夜無休で毎秒を知らせる連続報時が実施されていた。これを日本でも行なおうと云う計画である。場所は天文台の焼け跡に残った地下時計室、ここにあり合せの機材あれこれを集めて連続報時の装置を作ろうと云うのである。何しろ誰しも喰うや喰わずの状態であったし、連日水野さんを先頭に報時の係の人達の辛労は大変なものであっ

た。

「分秒報時」は昭和23年5月の礼文島日食を期に実現を見たし、同じ年その地下室を取り囲んで庁舎も出来上がり、水野さんも私もこの真新しい部屋に移ったのである。

それから間もなく、昭和25年3月突如として水野さんは辞職されたのである。天文をこよなく愛し、今の仕事を天職のように云っておられた水野さんが止められるとは全く思いもかけない出来事であった。そこで水野さんの御気持ちを伺ったところ、唯一と言「もうミリ・セコンドにほとんど疲れたのでネェ」と洩らされた。これが多分御本心だったのであろう。当時劣っていたわが国の時の精度を欧米のそれに追いつけ、追い越せと云うのが私達に課せられた命題で、事ある毎に「ミリ・セコンド」と云う言葉を聞かされ、またわれわれも口にしていたからである。事実この頃から東京天文台にも水晶時計の導入や写真天頂筒の建造の計画が着々と進められていて、リーフラー振子時計と子午儀の時代からの大きな転換期を迎えようとしている時期であった。

こうしてこの肝心なときに水野さんは横須賀学園で教鞭をとられることになって、私達の前から去られた。しかし間もなくプラネタリウムに勤務されることになって、再び天文学界に立ち戻られたのである。日本天文学会の講演会には必ず出席されるようになった。

私は水野さん御自身にはとても親しくして載いたが、御家庭については殆んど存じ上げなかった。しかし御奥様も3人の御子様もお元氣のようで、さぞ水野さんは御満足であられたことと思う。

御冥福を心から御祈りする次第である。

## 五島プラネタリウムでの水野良平先生の思い出

小林悦子

この夏は例年のない暑さでした。私どものプラネタリウムはいつもの夏休み通りのにぎわいでしたが、それももうすぐ終ろうというとき、突然、水野良平先生ご逝去の報に接し、しばし茫然といたしました。ついこの5月に2度ほど元気なお姿をお見せになったばかりですので、やはりこの猛暑がお体にさわられたのでしょうか。

水野先生は私どものプラネタリウムが、1957年4月に開館して以来、1974年に退職されるまで、学芸課長として、また天文の大先輩として、私たち後進を指導されるとともに、ずつとプラネタリウムの解説をされていらっしゃいました。長い間ごいっしょに仕事をしてまいりました者のひとりとして、プラネタリウムでの先生のプロ

フィールをご紹介します、追悼に代えたいと存じます。

水野先生の解説の特長は、独得の話術で、ファンも多かったようです。星さえ丸天井に映っていれば、補助投影機は不要なくらい——いや星だってもよかったですかも知れません。お若い頃から日曜学校や童話会でお話をされてこれ、その豊かな経験ゆえに、当然といえば当然と申せましょう。しかし他の解説者には、その真似は全くすすめられず、反対に、それぞれ個性的な解説がよいとされ、各自の自主性を重んじられて、何もおっしゃいませんでした。

先生ご自身もお話をするのが非常に好きで、少しぐらのお体の具合が悪い場合でも「解説すればなあって

しまうよ」とよくいわれ、事実その通りのようにお見受けするときもありましたが、ほんとうはそういうことのご無理が積ったのかも知れません。私たちがお医者に行くことをすすめても、なかなか行けなかったようです。

無類のコーヒー好きでいらして、ガソリンを補給していらしては(コーヒーを飲む)、解説を心から楽しんでおられました。近所の喫茶店では顔で、私たちもときどきお相伴にあずかったりしたものです。

水野先生の提唱で1960年からはじめられた幼稚園アワーは、最近の幼児教育が重視されるにつれて、当館でも超満員の盛況で、今では7月にたなばた、9月お月見、12月は冬の星と実施されています。また熱心なクリスチャンでいらしたので、「聖書と天文」と題された特別投影も何回かおやりになりました。

1972年にプラネタリウムを引退されてからも、ひきつづいて1974年まで囑託をされ、星の会などの解説をお願いいたしました。終りの頃はぜんそく様の咳がひどくお苦しそうで、次第に解説の回数が少なくなったことは大へんに残念でした。

先生は日常いつでもニコニコと本当にやさしく、私は一度も怒られた覚えがありません。大きな声をはりあげられるのは解説のときだけでした。来る者は拒まずの言葉の通り、誰にでも接せられ、ときおり現れる困った質問者や訪問者の応待も、いやな顔もされず、気のすむまで相手になっておられました。これは凡人の私たちにはなかなか真似のできないことです。

解説のないときには、計算尺を片手に自称チョットとした天文計算をされていました。それは例えば、1等星の絶対等級とか、半径、実視連星の2星間の平均距離などを求めたり、恒星の固有運動から5年後の星座の姿を求めたりしたものです。そのノート2冊、恒星編・太陽系編は、私たちがおねだりして、館に頂戴し、今は本箱に大切に保存してあります。悲しくも、それは先生の遺書となってしまいました。

また上野の科学博物館の天文普及講座でも、度々講演をされ、昨年(1977年)科学博物館100周年式典には、その功により表賞を受けられました。

お若い頃には社交ダンスがお得意でいらしたり、ヨットに乗られたり、なかなかのスポーツマンだったとのことですが、当館に来られてからは、そのお相手のできる者もないためあって、唯々キリスト教と天文だけのように見受けられました。しかし奥様とおふたりでの温泉旅行などは、しばしばされていたようで、旅行の写真を私たちにお見せになっては、愛妻ぶりを発揮されました。毎月の給料も袋のまま奥様に全部渡されるとか、お金には無頓着で経済はすべて奥様まかせということでした。服装も一見さりげない風でしたが、いつも蝶



ネクタイで、傘の入った細身のステッキ、ハンティングが、トレードマークでした。

天文の普及書も数多く執筆され、特に、1940年に光川ひろしのペンネームで出版された子供向の「宇宙旅行」は、先生お得意の四次元の世界に及び、当時としては画期的な内容で、今でも天文の先生方の間でときどき話題になっています。

そして満70才の誕生記念には自伝「星とともに」を自費出版され、私たちにもサイン入りで下さいました。今もその書を前にして、これをしたためております。

さて先生の思い出で、もうひとつ特筆すべきは、マイドームを建設されたことです。現在ではアマチュアでも相当に大きなドームや望遠鏡を建造されるのは、さして珍らしくありませんが、先生はそのパイオニアというべきでしょう。しかも全部ご次男の協力で御手製で作られたのが、ご自慢で、建設中の進行状況をうれしそうに話されるのを、私たちはよくお聞きしたものです。

そして落成後、学芸の者は全員招待されて、ドームの横の庭で、おでんやバーベキューをご馳走になったことが忘れられません。

マイドームで近所の星好きの人々を招待されて、観測の指導をされたり、「60の手習い」とお笑いになりながら、星野や惑星の撮影、現像、引伸しもされておいででした。なかでもオリオン座のピンボケ写真は、恒星の色がよくわかり、今もその計画的なスライドは学校番組などに使用させていただいています。天の川のきれいな写真など拝見しましたが、晩年は空がだいぶ悪くなったと、残念がられておられました。

「ふつうの人はアマチュアからプロになるのだけれど、私は反対で、プロからアマになりました」とよくいわれていました。解説もはじめは星座神話などほとんどされなかったのに、晩年は解説者のなかでも一ばん多く話されるようでした。

昨秋、オリオン霊園に旅立たれた野尻先生と、今ごろは空のどのあたりでお話をされているのでしょうか。心からご冥福をお祈りいたします。